

# 噴火湾環境情報 NO.2

2018/12/10

## 津軽暖流の占有率は例年よりも高め

道総研函館水産試験場  
調査研究部  
担当:西田, 渡野邊

2018年11月26~27日にかけて、噴火湾及びその周辺海域の環境調査を実施しましたので、その結果をお知らせします。深度10mと50mにおける水温、塩分の水平分布を図1に示します。水温は深度10m、50mともに12~13°Cで、平年よりも約2~3°C高くなっています。また、両深度の水温がほぼ同じことから、冬季の海面冷却による鉛直混合は深度50mまで達していることがわかります。

深度10mにおける塩分は33.6以上となっており、津軽暖流水(指標:水温6°C以上、塩分33.6以上)は表層付近まで分布しています。津軽暖流の湾内占有率は91.3%で、流入量は平年よりも若干多くなっています(図2)。また湾奥部の深度50mでは周囲より低温、高塩分の海域(水温12°C以下、塩分33.8以上)がみられており、低層水の上昇が示唆されます。

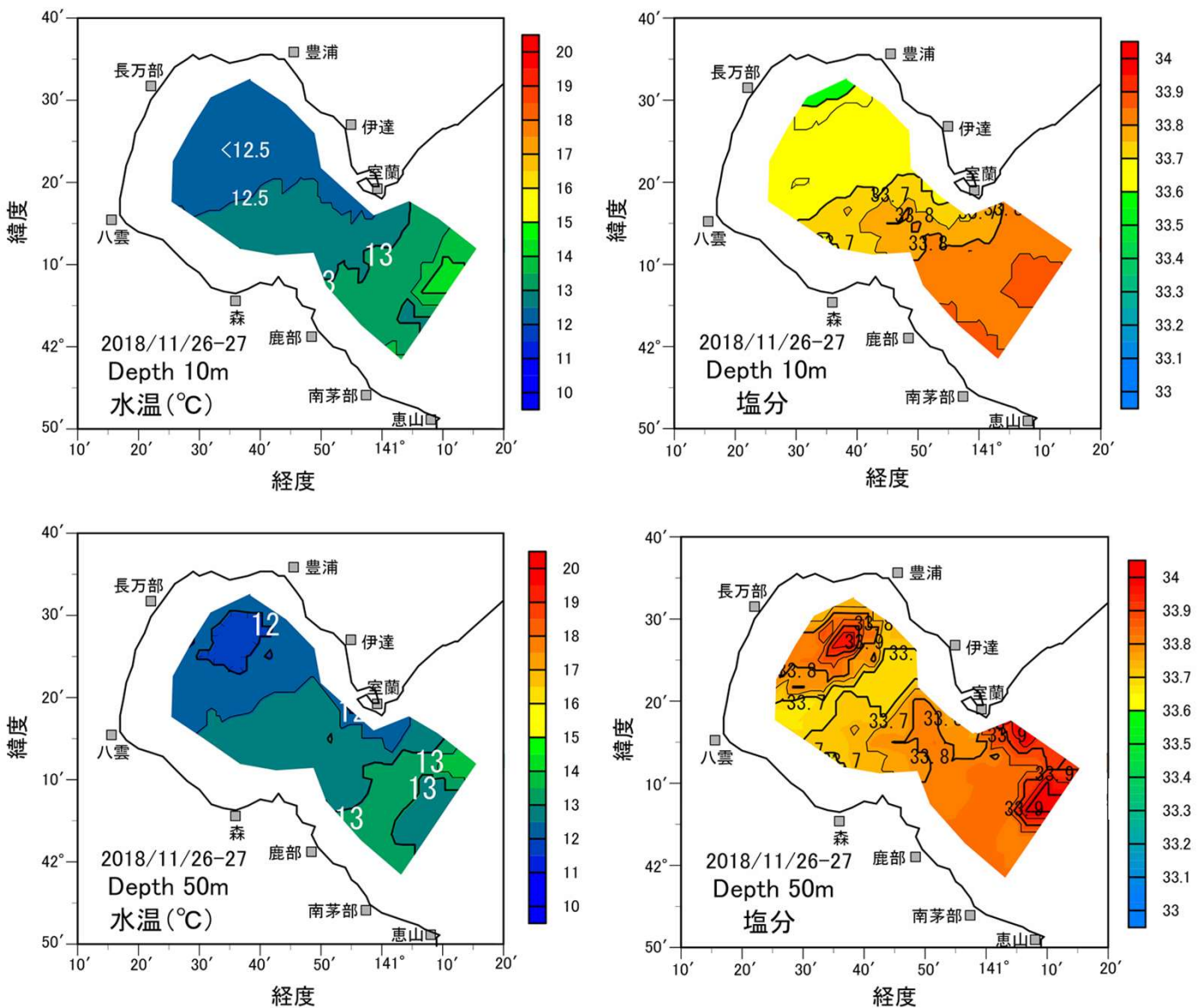


図1 噴火湾およびその周辺海域における(左)水温と(右)塩分の水平分布

噴火湾底層の溶存酸素量は、全域5ml/l以上であり、貧酸素水塊(指標:3ml/l以下)の形成は認められません(図3)。

湾内外の流速ベクトルの水平分布を図4に示します。湾内では湾奥部を中心に反時計回りの渦が形成されており、この渦の形成域は前述した低層水の上昇がみられた海域と一致することから、この渦の持続性は高いと考えられます。また、湾外では、時計回り、反時計回りの渦対が観測され、地形性波動の発生が示唆されます。もし地形性波動であれば、この渦対は岸を右手に見ながら伝搬していきます。

次回の調査は2月を予定しています。

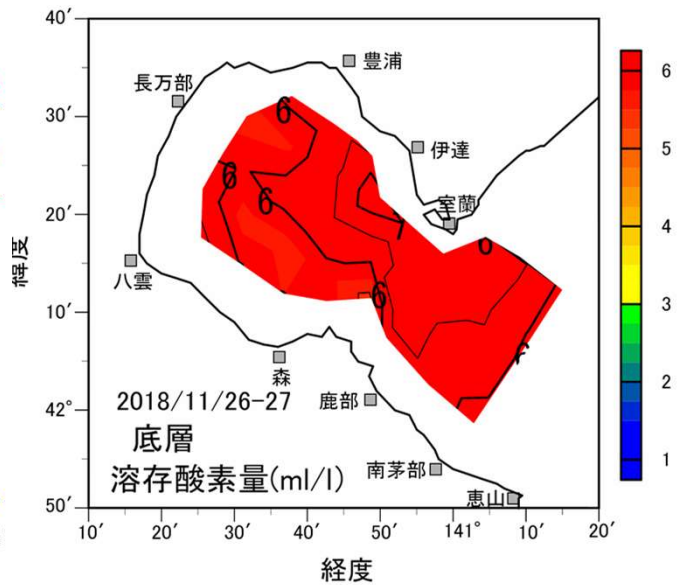
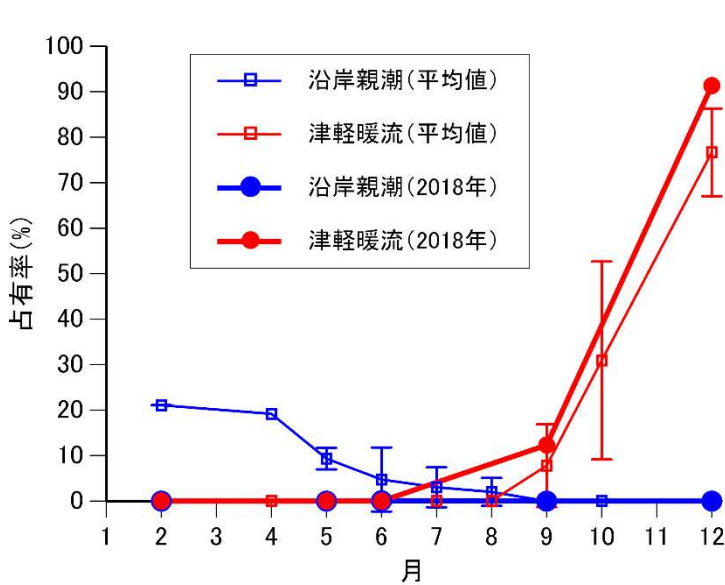


図2 噴火湾における沿岸親潮, 津軽暖流水の占有率

図3 底層の溶存酸素量

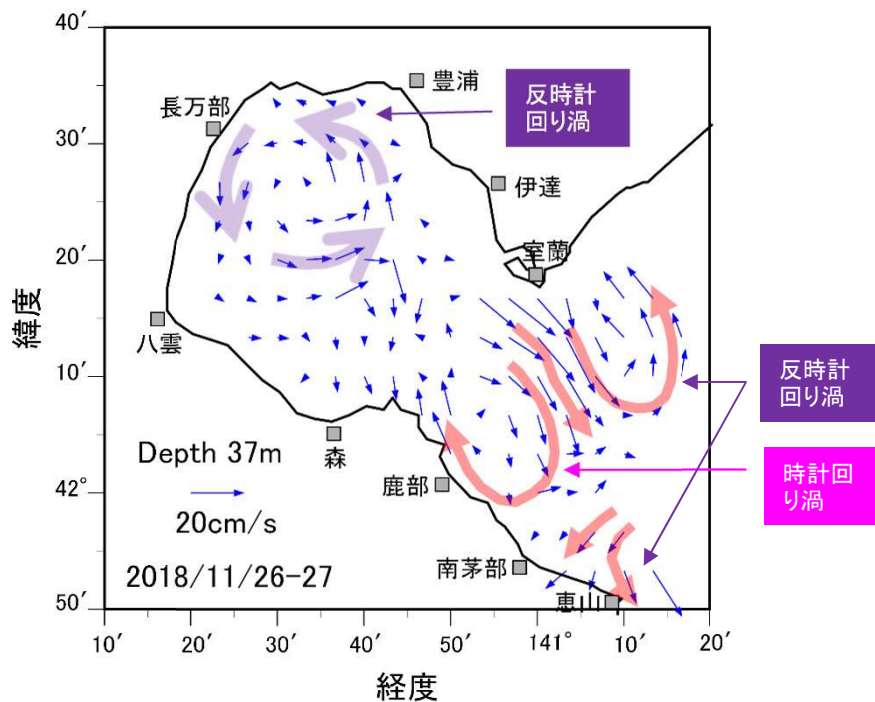


図4 流速ベクトルの水平分布